

日本郭沫若研究会事務局

二〇一七年六月二〇日発行

郭沫若研究會報

第十七号 (総No. 18)

目次

郭沫若とカビール……川崎洋子／1

『女神』の再認識（中）

「小我」と「大我」……魏建・岩佐昌暲訳／7

北伐途中の郭沫若と蒋介石……劉岸偉／11

打掌心、打屁股―不打不成人

―『沫若自伝』を読む(二)……上野恵司／15

郭沫若と李叔同の弟子李芳遠

の繋がりについて……齊藤孝治／17

2冊の著書を紹介する……岩佐昌暲／23

『林謙三《隋唐燕楽調研究》とその周辺』

『桌子的跳舞―清末民初赴日中国留学生與中国現代文学―日中學術研討會論文集』(上・下)

名和悦子会員・郭沫若関係資料の受贈について……編集部／26

執筆者紹介……6

郭沫若とカビール

大久保洋子

はじめに

郭沫若は『創造十年』で、「僕はタゴールの詩によってインド古代の詩人カビール (Kabir) を知り、インド古代のウパニシャッド (Upanisad) の思想に接近した」と書いている。(1) また「三個泛神論者」(以下「三人の汎神論者」) では庄子やスピノザとともにカビールをとりあげ、カビールの汎神論への崇拜を表明している。(2)

郭沫若はどのようにしてカビールを知り、またどのように理解していたのだろうか。本稿は、郭沫若のカビール受容について、その経緯と性質、さらにタゴールとの関係を探った研究メモである。不足の点が多々あり、諸先生方のご叱正、ご批判を頂ければ幸いである。

一 郭沫若のタゴール、カビール受容

郭沫若は一九一四年に日本に留学した。当時の日本はタゴールブームが始まったばかりであった。一九一三年にタゴールはアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞し、これを受けて日本ではタゴール作品の翻訳紹介が始まった。タゴールへの注目は高まる一方で、一九一五年にはさらに大きなタゴール熱が起こった。タゴールが英語で出版したほぼすべての詩と戯曲の一部が翻訳出版され、文芸評論家は相次いで評論を発表し、主要な雑誌はこぞってタゴール特集

を組んだ。郭沫若のタゴール受容の背景には、こうしたメディアの賑わいがあった。

『創造十年』によれば、郭沫若がタゴールを初めて知ったのは第一高等学校予科時代である。郭沫若は当時、一高三年の友人と同居していた。ある日この友人が持ち帰った英文の授業プリントに、タゴールの『新月集』から「岸の上」「眠れる倭児」「嬰兒の世界」などの詩が引かれていた。これを読んだ郭沫若はタゴールの清新で恬淡な詩風に胸打たれ、彼の初期の詩集や戯曲をほぼすべて読んだ。第六高等学校進学のため岡山に移ってからもタゴールへの崇拜は続き、タゴールにならって英文詩を作ったという。(3)

この記述に基づけば、郭沫若がタゴールに触れたのは一九一四年から一九一五年ということになる。

郭沫若が一九二三年に書いた「泰戈爾來華的我見」(以下「タゴール訪中の私見」)にも同様の記述があり、ここではタゴールの名を知ったのは「民国三年」(一九一四年)となっている。また、東京ではタゴールの著作はすぐに売り切れていたため、実際に『新月集』を入手できたのは一年後のことであった。郭沫若はタゴールの詩と思想に深く傾倒し、岡山図書館で毎日タゴールの詩と戯曲を読み、感動の涙を流し、「涅槃の快樂」を味わったという。(4)

郭沫若は一九三六年に行われた取材で、タゴールに触れたのは民国四年ごろであり、タゴールに関する書籍は「どんなものでも読んだ」(什么作品都看)と答え、当時読んだタゴールの作品集を列挙している。(5) その中には『One Hundred Poems of Kabir』(以下『カビール百詩』)(6)も挙げられている。

管見によれば、『カビール百詩』はタゴールからカビールを知りうる唯一のルートである。

カビールの口述詩集『Bijak』(『ビージャク』)を翻訳し、詳細な訳注と解説を付した橋本泰元の『宗教詩ビージャク——インド中世民衆思想の精髓』(以下『宗教詩ビージャク』)によると、『カビール

百詩』は、タゴールの友人である中世民間思想研究者がインド北部、特にベンガル地方で修業者たちから聞き取りや写本の閲覧を行ってカビールに帰すると思われる詠歌を採集し、タゴールがその中から百編を選んで英訳し、英国の神秘主義詩人イヴリン・アンダーヒル (Underhill, Evelyn, 一八七五〜一九四一年) が序文をつけ、一九一四年に英国で出版した詩集である。カビールの詩は十九世紀中ごろから一部の学者や宣教師によって抄訳されていたが、インド以外の地域では七十年代に至るまで『カビール百詩』がカビールを知る唯一の方法であった。(7)

日本では、一九一五年に宗教哲学者の齋木仙酔(一八八〇〜一九三二年)が『カビールとタゴール』という著書を出している。内容は『カビール百詩』の翻訳紹介およびカビールとタゴールの思想についての評論で、カビールの伝記的事項については『カビール百詩』の序文によっているという。(8)

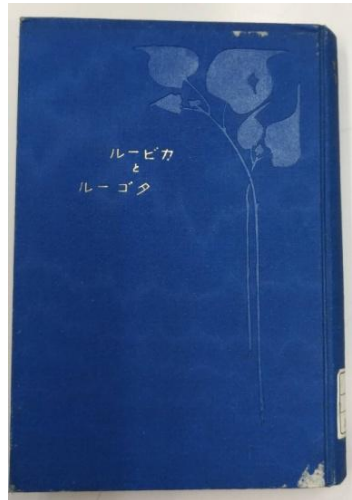
「三人の汎神論者」の原注には、「カビール (Kabir, 一四四〇〜一五一八年)、インドの禪学者、詩人(加比尔 (Kabir, 1440-1518)、印度的禅学家和诗人)とある。(9)『カビールとタゴール』にはカビールの生年のみ「一四四〇年」と記載され、没年は書かれていない。一方、『カビール百詩』の序文ではカビールの生没年が一四四〇〜一五一八年とされている(10)ことから、郭沫若「三人の汎神論者」の原注は『カビール百詩』序文に基づいたものといえよう。

二 齋木仙酔『カビールとタゴール』について

郭沫若は「タゴール訪中の私見」でも、かつて『カビール百詩』を読んだことに触れているが、齋木仙酔の『カビールとタゴール』は読まなかったの だろうか。

郭沫若がタゴールに関して読んだとした書籍には、『カビールとタゴール』は入っていない。だが、これをもって郭沫若が同書を読ん

齋木仙酔著『カビールとタゴール』表紙
福岡県立図書館(波多江文庫)蔵書



でいなかったとは断
定できない。

齋木仙酔の御令
孫である吉田邦郎氏
の『忘れられた宗教
哲学者 齋木仙酔』
によると、仙酔は本
名延次郎、広島県福
山に生まれた。一四
歳で天主教へ入信、
一九〇二年に東京外
国語学校を卒業後、

仙酔の号で文筆活動を開始し、トルストイの小説集などを翻訳出版している。一九〇七年に渡米、カリフォルニア州サクラメントで副牧師を務めるとともに、米国各地で講演活動を行った。一九一四年に帰国してからは福岡市大名町に居を構え、続く一九一五年にはトルストイやソクラテスに関する翻訳書のほか、『タゴールの哲学』、『タゴールの歌』などの著作を出版している。『カビールとタゴール』も同年の著書である。(11)

郭沫若がタゴールを知った時期と齋木仙酔のタゴール研究書が
公刊された時期はほぼ同じであり、タゴールブームのただなかであ
ったことから考えて、郭沫若が仙酔の著書を目にしていた可能性は
高い。

また、受容の可能性を考慮する要素の一つとして、郭沫若自身の
学究的な気質を挙げることができる。

郭沫若と同時期に日本に留学した創造社の面々をみると、田漢は
しばしば東京のカフェで遊び、郁達夫は歓楽街に入り浸り、張資
平は同居の留学生とともに浅草や吉原で遊んでいる。しかし郭沫若
は一貫して勉強に埋没し、学校の休暇中に旅行に行くほかは娯楽に

は近づかなかったようである。

郭沫若自身は『創造十年』で、高等学校在学中に一家を成し、ずっと日本の辺鄙な地方都市にいて、一介の留学生であったため、娯楽に触れる機会がなかったと書いている。しかし彼が娯楽に触れなかった原因は、生活環境のほかに、彼自身の性格的傾向を指摘できるだろう。

郭沫若の留学時代の同級生である銭潮は、「大学時代の沫若が私に永久に消えない印象を残したのは、勤勉さと進取の精神に富んでいたことであつた。彼の人柄は誠実で、勉強に没頭し、まったく身なりにかまわなかつた。福岡は九州の大都市で、快楽はいたるところにあつたが、沫若は少しも興味を示さず、日曜日は読書のほかは図書館に行つていた。最大の休息は古書店を回ることであつた」、「沫若はまじめな性格で、生活は厳粛で、福岡にいたときは、一度も娯楽場に足を踏み入れなかつた」と振り返っている。(12)

留学時代の郭沫若は娯楽を省みず学習に没頭していた。彼の日本における日常生活は家庭と学校の往復の中で過ぎて行き、学校の授業と、図書館や古書店で手にする書籍から多くの文学知識を得ていた。その勤勉な学習姿勢からみて、郭沫若が『カビールとタゴール』の存在を知らなかつた可能性はむしろ低いのではないだろうか。

なお、現存する『カビールとタゴール』のうち、公共図書館・大学図書館に所蔵されているものは合計しても二〇冊に満たない。現在の検索システムから漏れている蔵書があることを考慮しても、決して多いとは言えない。

筆者の調査では、郭沫若が高等学校時代を過ごした岡山県内の図書館には、同書の所蔵を確認できなかった。郭沫若が足しげく通つた岡山市立図書館は一九四五年の空襲で焼失しており、当時の蔵書は確認できない。二〇一六年六月二十六日付の『山陽新聞』の記事によると、手書きの写本を中心に約三百点の疎開資料が難を逃れ、また戦前の蔵書目録が存在しているらしい(13)が、これらの中に

『カビールとタゴール』があつたかどうかは未調査である。

なお、福岡県立図書館には蔵書を確認することができた。郭沫若は一九一八年に岡山の第六高等学校を卒業して九州帝国大学に進学していることから、同館の蔵書を目にしていた可能性もある。(14)

『カビールとタゴール』は、『カビール百詩』のうち九十七篇を抄訳し、訳者による評語を付し、カビールの詩風と内容、カビールの思想について分析を加えている。筆者は英文の『カビール百詩』の本文については未調査であるため、同書に則つたという『カビールとタゴール』の内容に関しても、まだ踏み込んだ論評を行うことはできない。このような前提を踏まえ、同書と郭沫若のカビール受容について、現段階で考えられる点および今後の課題を挙げてみたいと思う。

斎木仙酔は『カビールとタゴール』序文の冒頭で、「カビールはタゴールの先輩である。此の両者が如何なる関係を有し、如何なる異同を有するやを研究するはタゴール研究の最後の関門でなければならぬ」(15)として、両者を結びつけてとらえている。これはタゴールによつて『カビール百詩』が出版されたという事実を踏まえた認識によるものであろう。

斎木仙酔はさらに、汎神論思想は「印度の最も著名なる思想の一であるので、カビールにも必ずあるに違ない」として、カビールの詩から汎神論思想が読み取れる部分を指摘し、カビールを汎神論者と位置づけ、さらにカビールとスピノザを結びつけて理解している。(16)

仙酔のカビール理解はタゴールが編んだ『カビール百詩』によるものであり、タゴールが汎神論者として理解されていたことから考へると、カビールをも汎神論者とする見方は自然なものといえるだろう。

このようなカビール理解、さらにはスピノザとカビールの思想に汎神論という共通点を見出す点は、郭沫若が「三人の汎神論者」で

スピノザとカビールを並列させて描いている点と重なり合う。これが『カビール百詩』のみの影響によるものであるのか、あるいは『カビールとタゴール』の影響も加わっているのかは、今後確認しなければならぬ。

また郭沫若は、タゴールとカビールに触れたことを契機として古代インド宗教の奥義書「ウパニシャッド」に接近したと書いている。(17)

タゴールの英文詩には「ウパニシャッド」の文字は見られず、『カビールとタゴール』にもウパニシャッドについて触れた部分はない。だが『カビール百詩』序文および『カビールとタゴール』には、「ヴェーダ」「ブラフマー」といったインド古代思想の概念や用語が随所に見られることから、郭沫若はタゴールやカビールについて学ぶうちにこれらの概念について疑問を持ち、独自に研究を進めていったことが考えられる。

なお斎木仙酔のタゴール研究書を除き、当時の日本で入手可能であったインド古代思想に関する文献について拙稿は未調査であり、今後の課題である。

三 カビール受容の変質

郭沫若におけるカビール像と、後年の研究によって明らかになったカビール像には、多くの点で食い違いが見られる。

『宗教詩ビージャク』によると、カビールは汎神論者というよりも一神教主義者であった。カビールの生まれた共同体は、ヴァルナ体制のもとでは下層に位置づけられ、カビール自身は下層階級の機織職人として、文字を知らず、サンスクリット聖典に近づいたこともなければその知識もなかったという。(18)

以下、同書の「訳者まえがき」と「解説」から、筆者がカビールとその詩に関して得た基礎知識の概略を紹介したい。

カビールの属していた共同体は、十二〜十三世紀ごろにイスラム教に集団改宗していた。しかし彼らのイスラム化は表層にとどまり、彼らの信仰は仏教とヒンドゥー教の混交形式であった。カビールも公的にはイスラム教徒でありながら、地域に根差した仏教の一派であるナート派の形態を信仰していた可能性が高い。

当時、ヒンディー語は初期発展段階にあり、カビールは耳から学んだ混成言語を使用して民衆に呼びかけ、ヒンドゥー教・イスラム教の教条・形式主義と人間差別を弾劾し、人間本然の神性への覚醒と帰依を訴えたという。

現在、カビールの作に帰せられる詩はすべて口承によって伝えられたものであり、普及の範囲は広く、長期間にわたることから、伝承の過程で改変されたものもある。カビール作とされている詩集のうち、『ビージャク』は最も信頼性の高い宗教詩集である。『ビージャク』はカビールの語録であり、カビールの弟子たちが収集したものとされている。『ビージャク』に集められた詩は、インドの伝統的な韻律や修辞法を使用せず、荒々しい表現や平凡な比喻、厳しい皮肉をもつてきわめて直接的に文字、特に「ウパニシャッド」における経典を批判している。カビールはすべての宗教的儀式と形而上の宗教学を否定し、これらの儀式と哲理、形式を崇拜する人と行為を批判したという。

タゴールの『カビール百詩』に収録された詩は、カビール作としてインド各地に流布している詩を収集したものである。だが『カビール百詩』に収集された詩は『ビージャク』にはほとんどみられず、真正性が疑わしいという。『ビージャク』の詩は荒々しく主知的で、広範にして容赦のない風刺が盛り込まれているが、『カビール百詩』で英訳された詩にはそうした荒々しさがみられない。「偉大な神秘家」「普遍的宗教の使者」「勇敢な社会改革者」といったカビールのイメージは『カビール百詩』序文によって描かれ、広まったものである。(19)

以上のように、齋木仙酔ひいては郭沫若における「カビール」汎神論者」という理解は、カビールの実像とは大きく異なっていた。そこに『カビール百詩』の影響があつたことは確かである。

私見によれば、『カビール』と『タゴール』が紹介しているカビールの詩は敬虔な信仰心を表したものが多く、儀礼や形式主義を批判したものはわずかにとどまる。少なくとも『カビール』と『タゴール』の詩に『宗教詩ビージャク』で指摘されているようなカビールの思想の本質を見ることは難しい。

郭沫若におけるカビール像に『カビール百詩』の影響があることはおそらく肯定して良いだろう。ここに加えて『カビール』と『タゴール』の影響があるかどうか、現段階では言明することはできないが、いずれにせよ、郭沫若のカビール受容には、当時のカビール理解からくるある種の変質をはらんだものがあつたといえるだろう。

おわりに

本稿では、郭沫若の知識がタゴールからカビール、インド哲学へと広がっていく経緯とその性質についてみてきた。推測の域を出ない部分もあるが、郭沫若のタゴール研究は広範かつ深いものであつたといえよう。

しかし、このように熱心な研究の成果が、中国における初期のタゴール受容に大きな貢献を果たすことはなかったようである。

一九一七年八月九月、郭沫若は『新月集』、『ギータンジャリ』、『園丁』などの詩集から『タゴール詩集』を編纂し、上海で出版する計画を立てた。彼は商務印書館と中華書局に手紙で問い合わせたが、中国ではまだタゴールが流行していなかったため、二社はともに郭沫若の提案を受け入れなかったという。(20)

一七年にタゴール詩集の翻訳出版を拒否した中国の出版界は、五年後の二三年にあつてようやくタゴールを知り始めた。一方、郭沫

若はこの時すでにタゴールから離れ始め、社会主義思想に触れていた。

郭沫若は「タゴール訪中の私見」で、タゴール熱に浮かれる中国の状況に対して、冷やかな見方を示している。のちの「郭沫若詩作談」では、「タゴールに接近したのは、中国ではおそらく私が最初であつただろう」(最先対太戈爾接近的，在中國恐怕我是第一個)(21)とも語っている。

郭沫若は他の中国の知識人に先んじてタゴールについて十分な研究を重ねていたにもかかわらず、中国国内に受容の基盤が生まれていなかったために紹介の時機を逸してしまった。タゴールに関する郭沫若の記述には、そのような矜持と無念さ、憤懣をはらんだ複雑な思いが込められているように思えてならない。

注

- (1) 郭沫若「創造十年」、『創造十年 続・創造十年』松枝茂夫訳、岩波書店、一九八六年、第五十四頁。
- (2) 郭沫若「三個泛神論者」、『時事新報・学灯』一九二〇年一月五日。引用は『郭沫若全集』文学編第一巻、人民文学出版社、一九八二年、第七十三〜七十四頁。
- (3) 郭沫若「創造十年」、第五十三頁。
- (4) 郭沫若「泰戈爾來華的我見」、『創造週報』第二三三、一九二三年十月十四日、第三頁。
- (5) 郭沫若談、蒲風記「郭沫若詩作談」、『現世界』創刊号、一九三六年八月一日。引用は『郭沫若研究資料』上、知識産権出版社、二〇一〇年、第二一三〜二一四頁。
- (6) Tagore, Rabindranath. 1915. *One Hundred Poems of Kabir*. LONDON: Macmillan and co., limited.
- (7) 橋本泰元『宗教詩ビージャク——インド中世民衆思想の精髓』

平凡社、二〇〇二年、第五〇六頁。なお、本稿執筆にあたり参照した国立国会図書館蔵『One Hundred Poems of Kabir』の出版年は一九一五年となっている。

(8) 斎木仙酔『カビールとタゴール』、東華堂書店、一九一五年、第二〇三頁。

(9) 『郭沫若全集』文学編第一巻、第七四頁。

(10) Introduction, One Hundred Poems of Kabir. p. v; xviii.

(11) 吉田邦郎『忘れられた宗教哲学者 斎木仙酔』、文治堂書店、二〇一三年、第二九六〜二九九頁。

(12) 銭潮口述、盛巽昌整理「回憶沫若早年在日本的学習生活（抄録）」、『郭沫若研究資料』上、第四四七、四四八頁。

原文：大学時代の沫若、给我留下永磨不灭的印象是好学深思，富于创新。他为人诚朴，一心埋头读书，从不注意边幅，福岡是九州岛上的大都市，犬马声色，比比皆是，沫若从不问津，星期日，除了读书，上图书馆，最大的休息就是逛旧书店。／沫若作风正派，生活严肃，在福岡期间，从不进入冶乐场所。

(13) <http://www.sanyonews.jp/article/373821/> (二〇一七年五月十八日閲覧)

(14) 本稿執筆後、編集部より以下のご指摘を頂いた。記して感謝申し上げたい。(以下転記) 福岡県立図書館も、大久保論文に紹介された岡山市立図書館と同様一九四五年六月空襲によって建物・図書ともに焼失している。館蔵の『カビールとタゴール』は当時のものではなく、収蔵印から判断して、昭和四〇年に波多江嘉兵衛氏家族から寄贈され、波多江文庫の一冊となったものである。また、郭沫若の九大在学時に、県立図書館に本書が収蔵されていたかどうか、まだ調査していない。現段階では郭沫若が本書を目にしていたかどうかは不明というほかない。調査を待ちたい。

(15) 斎木仙酔『カビールとタゴール』、第一頁。

(16) 斎木仙酔『カビールとタゴール』、第二十一頁。

(17) 郭沫若「創造十年」、第五十四頁。

(18) 橋本泰元『宗教詩ビージャク——インド中世民衆思想の精髓』、平凡社、二〇〇二年、第四頁。

(19) 橋本泰元『宗教詩ビージャク——インド中世民衆思想の精髓』、「訳者まえがき」および「解説」。

(20) 郭沫若「泰戈爾來華的我見」、『創造週報』第二三号、第四頁。

(21) 郭沫若談、蒲風記「郭沫若詩作談」、『郭沫若研究資料』上、第二二三頁。

本論文中の画像に用いた斎木仙酔著『カビールとタゴール』表紙は、福岡県立図書館・波多江文庫の蔵書である。撮影と画像掲載を許された同図書館資料課のご好意に感謝する。(編集部)

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第17号執筆者紹介(掲載順)

大久保洋子(おおくぼ ひろこ) 二松学舎大学非常勤講師・中国現

代文学

魏 建(ぎ けん) 中国郭沫若研究会副会長・山東師範大学文学

院教授・中国現代文学

劉 岸偉(りゅう がんい) 東京工業大学教授・比較文学・比較

文化

上野恵司(うえの けいじ) 一般財団法人日本中国語検定協会理事

長・共立女子大学名誉教授・中国語学

斉藤孝治(さいとう こうじ) 著述家・一般社団法人中日文化研究

所所長

岩佐昌暉(いわさ まさあき) 九州大学名誉教授・中国現代文学

『女神』の再認識（中）

魏 建著／岩佐昌暉訳

目次

はじめに

- 一 覆い隠され捻じ曲げられた『女神』
- 二 「小我」と「大我」（本号）
- 三 『女神』は結局中国詩にどういった貢献を行なったのか？

二 「小我（個人）」と「大我（集団）」

前述したように、魯迅と郭沫若は新文化運動における文学創作面の先駆者である。先駆者としての彼らの意義は決して、ただ「主将の命令を聴いた」という点にだけあるのではなく、ふたりがそれぞれ中国新文化建設に対し、ゼロから創り出すという貢献をした点にある。さらに細かく言えば、魯迅と郭沫若には違いもある。魯迅が作品で旧文化の実体を示してみせ、それへの批判を重んじたのに対し、郭沫若は新しいイデオロギーの唱導と実践に重きをおいた。その新たな唱導と実践は主に『女神』のなかで体现されている。

1 「訳注」魯迅は『呐喊』自序で、自分の作品は当時の新文化運動の主将（陳独秀ら指導者）の命令を聴いて書いたものだ、という趣旨のことを述べている。

まず、『女神』はこれまでになく「小我」とそのエネルギーを顕彰した。

これまでの研究成果と文学史の著作では『女神』中の「我」はただいた「大我（集団）」と理解されてきた。文学史著作で今でもまだ流行している観点は「五四の時代精神を体现する現代的『自我』の形象を創り出した」というものであり、より馬鹿げた言い方は「この『自我』は五四時代の人民の革命的理想的化身で、時代の英雄の集団である」というものである。しかし『女神』の最初の詩は純粹に郭沫若の私的な恋愛詩であり、それゆえ詩中の「我」は「小我」でしかありえない。これについて、郭沫若は何度も言及しており、例えば「我的作詩的經過」ではこう書いている。

民国五年の夏秋のころ彼女（安那を指す—引用者）との恋愛感情が生まれ、詩を書きたいという私の欲望がようやく真剣に芽生えてきた。『女神』に収めた「新月与白雲」、「死的誘惑」、「別離」、「維奴司（ベニス）」は、いずれもその前後に彼女のために作ったものである⁴。

郭沫若は『創造十年』でも恋愛中に安那に詩を捧げたことを述べている。

2 朱棟霖等主編『中国現代文学史（一九一七—二〇一三）』第三版、北京、高等教育出版社、二〇一四年版、第78頁。

3 党秀臣主編『中国当代文学史』北京、高等教育出版社、一九九四年版、第70頁。

4 郭沫若「我的作詩的經過」、「郭沫若全集」文学編第16卷、第二—三頁、人民文学出版社一九八九年出版。

「辛夷集」巻頭の題辭はもとと一九二六年のクリスマスに私が英語で書いて安那に献呈した散文詩で、後に私がそれを中国語に直したものだ⁶。

郭沫若は「五十年簡譜」の「民五年（一九一六年）」の項にこう書いている。

夏期休暇中東京で安那と知り合い、恋愛感情が生まれる。長期間、日本語で手紙のやりとりをし、かつ新詩を書き始める。（「残月黄金梳（残月は黄金の櫛）」および「死的誘惑」はこの時の作品。）ゲーテの作品を読む。十二月安那が岡山に来て、同居する⁷。

「残月黄金梳」は『女神』に入れるとき「別離」と改題している。

これら一切が物語っているように、『女神』の最も早い作品は一九一六年の郭沫若と佐藤富子との恋愛で生まれた。恋愛中の恋愛詩の作者以上に「自分中心」（原文は「小我」——訳者註）である者がいるだろうか？もしかしたら、読者は「小我」は一九一六年の熱愛の時期の、「新月与白雲」、「死的誘惑」、「別離」、「維奴司」といった短詩の中だけだと思われるかもしれない。だが事実はそうではなく、一九二〇年に書かれた「鳳凰涅槃」のような長詩でさえ、やはり「小我」の作品なのだ。ちょうど「鳳凰涅槃」創作中の一九二〇年一月十八

⁵ 郭沫若『創造十年』第75—76頁、上海、現代書局一九三二年出版。

⁶ 郭沫若「五十年簡譜」、「郭沫若全集」文学編第14巻、第五四五頁、人民文学出版社一九九二年出版。

日、郭沫若は宗白華に手紙を書いているが、そのなかでこう述べている。

慕韓、潤嶼、時珍、太玄はみな僕の昔の学友です。僕は彼らに対し、本当に自分の醜さを恥ずるばかりです。まさに amoeba にさえも及ばないのです！ああ！要するに、白華兄、僕は「人」ではない、僕はダメになった人間です。僕は君が「敬服」するに値しない人間です。僕はいまでも Phoenix のようになりたい。香木を拾い集めて、僕の今もついている形骸を焼却し去り、哀切な挽歌を歌いながら、すべてを焼却し去り、その清く冷たくなった灰の中から「僕」を再生させたいのです。しかし、それものついに一つの幻想に終わるのではかと恐れているのです！⁸。

一九二〇年二月九日、田漢は郭沫若にあてた手紙で書いている。

君の長詩「鳳凰涅槃」、ぼくは読んだ。君はいま鳳凰と同じように、自分の形骸を焼き尽くしてしまいたい、哀しい挽歌を歌いながら、焼いてしまい、冷たく清浄な灰の中から、「自分」を再生させることができればいいのに、と思っているんだらう？素晴らしい。絶

⁷ （訳注）潤嶼、即ち王光祈（1892—1836）、筆名は若愚、四川温江県人。少年中国学会の発起人の一人である。時珍「王光祈と同じ船で渡独。理数学専攻」、即ち、魏嗣鑾、四川蓬安県人。少年中国学会会員。太玄、即ち周太玄（1895—1968）、元の名前は周焯、又周無ともいう。四川新都県人。少年中国学会の発起人の一人である。以上の人たちは、みな郭沫若の成都高等学堂分設中学塾時代の学友である。

⁸ 黄淳浩編『郭沫若書信集』上、北京、中国社会科学出版社一九九二年出版、第87—88頁。

対幻想ではないよ。どんな人であれ、その人が自分の「再生」の願いをおこしさえすれば、神は応えないわけにはいかないからね。ぼくは(11)で君の「新たな我」New Egoを見守っているよ⁹。

ご覧のように、郭沫若が「鳳凰涅槃」を創作した動機は「五四の時代精神」とは基本的に無関係であり、詩の中の「我」も「五四時代の人民革命の理想の化身」だとか「時代の英雄の群像」といったものではない。

こうした「大我」を重視し、「小我」を軽視する観念は儒家の伝統的な道徳的要求から来ており、今でも強大な生命力を備えている。それは中国人の文化的血液の中に染みこんだ―自由より責任を先にし、権利より義務を先にし、集団は個人より高く、調和は衝突より高い、という体系的な価値の準則であつて、そこで文化共同体の均衡と安定を維持しているのである。このような倫理準則によれば、「集団」の「大我」は大きければ大きいほど価値があり、個の「小我」は必ず「大我」に従順しなければならず、はなはだしくは「大我」のためには「小我」を犠牲にしてもいい、ということにさえなる。だが郭沫若は明らかにこのような伝統的な自我の価値観を自覚的あるいは無自覚的にひっくり返している。『女神』は未曾有の程度にまで個人の主体的地位を強調した。それは郭沫若の倫理原則が中国新詩にもたらした、主観を重んじ、表現を重んじ、情緒を重んじる新たな美学原則だったのである。

これまでの研究成果と文学史の著作が決まって郭沫若の「小我」

⁹ 郭沫若等『三葉集』『郭沫若全集』文学編第15巻、第37頁、人民文学出版社一九九〇年出版。

を「大我」と読み解いてきたのはなぜだろうか？それは主要には『女神』の抒情主人公が作者によつて空前の規模にまで大きくされたからである。『女神』の「我」は現代人の自由な精神（原文「心霊」）の大発見であり、現代人の主体的自我の大拡張だった。

例えば「天狗」中の「我」は最初の一つの「小我」であるが、この「我」が「月を呑み」、「日を呑み」、「すべての星を呑み」、「宇宙を呑」んだ……その後、「オレはオレだ！」となる。抑圧され、小さく縮んだ「我」から、太陽や月も呑むことのできるような「我」に変わったのだ。「礼に非ざれば視る勿れ、礼に非ざれば聴く勿れ、礼に非ざれば言う勿れ、礼に非ざれば動く勿れ」の「我」から、燃焼することができ、叫喚することができ、飛び走ることのできる自由な「我」に変わったのだ。ごくありきたりの、尊厳などない「我」から、全宇宙のエネルギーを擁する限りなく高大な「我」に変わったのだ。小文字の「我」から、大文字の「我」に変わったのだ。だがこの時、「オレのオレは爆発しそう！」であるにもかかわらず、「我」は依然として一つの「小我」なのだ、集団の「我」ではなく、個の「我」なのだ。主体の精神の大発見、主体の自我の大拡張たる覚醒した「我」を「大我」と同等とするわけにはいかない。

五四時期の個性主義の思想原則は、文学芸術においては、それにふさわしい美学原則によつて充たされる必要があつた。「五四」の思想的先駆者にあつては、個性主義は理論レベルでの指導思想だった。郭沫若に至つて、個性主義はすでに内在化された芸術原則、すなわち「自我表現」の抒情文学の原則、つまりは「人」の情感、欲念、意思の自由な主張と理想的な人格の再構築という文学的追求へと発展していた。『女神』の「我」は、一個の「小我」ではあるが、郭沫

若の詩的な表現により、もはや小さな存在ではなくなり、極めて大きな主體的エネルギーを付与された。この個人はひとりひとりすべて一個の世界なのである！

郭沫若は最初『女神』を書いたとき、タゴールと汎神論の啓示を受けた。汎神論は十六世紀から欧州大陸で流行した哲学の学説である。この学説は世界に超自然的な主宰者と精神的力が存在することとを否定し、宇宙の本体は神であり、神は自然万物の中に存在するとみなす。汎神論が封建的政治体制を脱したばかりの中国に伝わってきたとき、中国人の観念に与えた衝撃は、まさにそれが中世から歩み出たばかりの欧州に出現したときに生まれた影響に等しかった。それは宗教神学と封建的専制に抗議し攻撃する意義を有していた。だから、それが先進的な世界観と距離があるということを以って、その歴史的役割を否定するわけにいかなかったのである。

汎神論の影響を受けたという郭沫若の大量の回想から見取れるのは、汎神論は郭沫若にとつて主要には一種の哲学的な認知ではなく、むしろより多くは宗教的認知プラス詩的認知であり、さらに言えば宗教と詩の間の精神的漫遊により近かったということである。郭沫若の道（真理）の悟りは詩美の感受と結びついていた。だからタゴールの汎神論思想と郭沫若の思想の関連を見るだけでは不十分だし、タゴールの詩と郭沫若の詩の関連にだけ目を向けるのも不十分なのである。郭沫若がタゴールから得たのは一種の精神的境地の昇華であるが、それは宗教的境地と芸術的境地がたがいに育てあげた昇華である。道が郭沫若を詩の深遠な境地に入らしめ、詩が郭沫若に道の極致を悟らしめたのだ。なぜなら、一人の優れた詩人にとつて、道を発見しさえすれば「詩美以上の喜びを感受する」ことが

できるからだ。道についての言説こそが詩であり、道こそ詩の最高の境地なのである。

当時の郭沫若は詩人の役割と詩人としての最も理想的な宇宙観によって汎神論を認識していた。だから郭沫若によって本当に吸収された汎神論は、哲学的なものというよりも、詩学的なものであった。それは彼が神と自然の関係を掌握する方式だったと言うよりは、むしろ彼の芸術と世界を掌握する方式だったと言っている。汎神論から、彼が捕まえてきたのは汎神論だったが、手に入れたのは詩だった。もし、彼の汎神論に哲学的内容が含まれているとすれば、それは一種の主體性を高揚させる人生哲学でもあり、もつと言えば対象と自己の一体化（原文「物我同一」）を追求する芸術哲学のようなものだった。汎神論を受容した後、郭沫若はいたるところに存在する神の奴隷とならなかったのみならず、逆に神の教えによって天から授かった自由を得たかのようにだった。それは優れた詩人のみが享受できる自由だった。詩人が神を自己および万物と同等の地位に引き寄せたとき、「すべての偶像は僕の前でぶち壊される」のだ。詩人が自分をも奉じて神としたとき、「一切の自然はすべて僕の表現」となるのだ。そこで郭沫若の詩は広い自我表現の世界を勝ち得る。「自我」は日月を飲み込み、志は宇宙を覆うことができ、社会万物は「絶えざる破壊、不断の創造」ができるのである。この汎神論の宇宙観は、一種の詩的な思维方式でもある。それは郭沫若のために個人の精神と情感が馳せめぐる空間の領地を提供し、また彼の詩想の運用のために自我と万物が過去と今を自由に行きかい、絶えず超越し、不断に生まれ変わる時間の隧道を敷設したのである。（待統）

北伐途中の郭沫若と蒋介石

劉岸偉

はじめに

蒋介石の年譜を読むと、一九二六年十月以後、郭沫若の名がしばしば見える。例えば十月九日条に、鄧演達宛ての電報が記録され、郭沫若を北伐軍総政治部副主任に任命とあり、十一月十七日、蒋介石は郭沫若に「捕虜宣伝大綱」を作成するよう打電した。さらに二日後の十九日、蔣は南昌総司令部の属僚を集めて訓戒した後、郭沫若を個別に呼んで話をし、政治部には経済課を設けて占領区域の経済状況を調査するよう指示した。その頃北伐軍は破竹の勢いで推進し、かつて北洋系の群小軍閥が次々に国民政府に帰服を表明した。国共合作による党務の発展、民衆の動員は下から北伐を支えていた。政治工作の威力を目の当たりにして、蒋介石は二十二日「総理記念週」の際に演説し、「必ずしも武力を用いる必要もなく、政治の力で南西や南東を統一できる」との見通しを示した。当時、蔣は鄧演達との関係も良好で、鄧主任の下に秘書長を務めた郭沫若の活躍は彼に深い印象を与えたのであろう。この小稿は長沙占領から武昌落城までの郭沫若と蒋介石の動きを記すものである。

* * *

兵力を集中させてまず呉佩孚を撃破するため、蒋介石と国民政府は孫傳芳や張作霖に対して、遠交近攻という策略を取った。七月二十四日、長沙を占領した唐生智は各軍の將校を招集し次の作戦計画

を検討したが、湖北、江西を同時攻撃という唐生智と李宗仁の提案が認められた。^{*1} 八月五日、棲鳳渡に着いた蒋介石はカロン將軍と唐、李の作戦計画を吟味した結果、武昌に迫る時、列強干渉の恐れがあるから、兵力を集中させ、武漢攻撃を優先にして江西に守勢をとるというカロンの意見に蔣も賛同した。^{*2}

八月十一日、長沙入りした蒋介石は翌日の夜、藩台衙門で唐生智、李宗仁、白崇禧、朱培徳、陳可鈺(第四軍副軍長)、鄧演達、カロン、それに呉佩孚に反旗を翻して新たに北伐陣営に加わった貴州軍首領袁祖銘の代表らを集めて軍事会議を開いた。繰り返し検討した結果、各個撃破の戦略を再確認、第二、三、六軍が江西の孫傳芳を監視し、第七、八軍が平江を攻め、第八軍の一部、第一、三軍は第四軍と共同で汨羅を攻める作戦を決定した。^{*3} 八月十七日、総攻撃の前日、蒋介石は孫傳芳に電報を打ち、呉佩孚の偽命を受けず、広東の根拠地を犯さなければ、「五省総司令」の名称を認めても良いと伝えた。^{*4} 孫傳芳との交渉はあくまで両面作戦を避け、敵の攻撃を遅らせる計略であつて、武漢攻略に貴重な時間を稼いだと言つていい。

八月十八日、岳州への総攻撃が始まり、主力部隊は平江、通城に出撃し、呉軍の退路を断つた。翌日、第七、第八軍は汨羅江を渡り、北伐軍は湖北戦場へと推進した。

当時総政治部主任鄧演達の下に前線秘書長として従軍した郭沫若は、長沙から汨羅を渡り、崇陽の山中を跋涉して武昌城下にたどり着くまでの忘れがたい日々を「北伐途次」にまとめ、後に雑誌『宇宙風』に掲載した。北伐目撃者の貴重な証言である。回想録は一九二六年八月二十四日、政治部の先遣隊が長沙を離れた時から書き始めるが、その出発の動機と目的について、ロシア人顧問テルニ(鉄羅尼 Teruni)の通訳紀徳甫から聞いた話として、こんな興味深い記述がある。

その日の午後、総司令部で秘密の軍事会議が開かれたのだつ

た。われわれの突然の出発はこの会議で決定されたのである。平江・通城方面の第四軍がつぎつぎに決定的な勝利をおさめたので、敵は全線にわたって総退却し、岳州は攻撃を待たずして陥落した。敵が最後の決死の戦いをするのはたぶん汀泗橋・賀勝橋一带になるだろう。この最後の抵抗が突破されれば、武昌城の陥落は時間の問題になる。しかしこのような情勢のもとでは、われわれは軍事的には呉佩孚と武昌を争わねばならないのだが、政治的には新たに味方についたばかりの第八軍と武昌を争わねばならないのだった。湖北の政權は唐生智の手に渡すわけにはいかない。われわれが現在とっているコースは近道をして唐生智をさえぎるため、直線コースで第四軍を追っているのだ。*5

鄧演達に同行したテルニは騎兵将校の出身だが、政治理論に長けていて、文芸の素養もあり、ロシアの薄命詩人エセーニンの詩を愛読していた。彼の観察では、唐生智は野心をもつ機会主義者で、八月中旬長沙で蒋介石に会った時から、蔣を倒し、総司令の椅子を取って代わろうとしたという。*6八月十日、長沙到着の前日、蔣は李宗仁と長時間話し合っていた。話題は唐生智にも及んで、「孟瀟（唐の字）の革命決心を知り、喜ぶべく祝うべし」と日記に書き記していたが、*7心底唐のことを信用していないらしい。鄧演達が政治部先遣隊を先回りして武昌へ遣わしたのは、むしろ蒋介石の意向であろう。

武漢攻略の鍵は汀泗橋である。汀泗橋は粵漢鐵路（広州・漢口）上の軍事的要衝で、南・西・北の三方を水に囲まれ、東側は山地で守るに易く攻めるに難い堅固な拠点である。鉄橋の上に鉄条網が張られ、頑丈なトーチカで固められている。北軍二万人がここを守り、呉佩孚はみずから督戦し、武漢からの援軍を待つとともに、江西の孫傳芳とも連絡して北伐軍の挟み撃ちを企てていた。汀泗橋の一戦は北伐の勝敗に関わる運命の戦いとなった。汀泗橋攻撃の主力は第

四軍陳銘枢の第十師、張發奎の第十二師、それに中共黨員葉挺が率いる独立団（連隊）であった。郭沫若は武昌城外でシガーを銜えている陳銘枢と初めて対面した。中背の、黒ずんだ赤銅色の顔をした陳は郭沫若になかなか好印象を与え、「非常に沈着勇敢で、まるで閔聖帝君が生まれ変わったような人」と思われた。また洪山麓近くの小さな村落で前線視察にやって来た蒋介石、カロン將軍一行に出くわし、その中に背が低く頬が痩せこけていて、頭には戦闘帽、身には洗いざらしの青い木綿の軍服を着、ズボンをたくし上げた、パツとしない恰好の男がいたが、実は勇名轟く張發奎で、みんなは彼のことを「張飛」と呼んでいた。そして郭は北伐軍中の猛将である独立連隊長の葉挺にも会った。当時対外宣伝では葉挺のことを「趙子龍」と呼んでいて、そのあだ名をつけたのは郭沫若だった。*8

汀泗橋攻撃は八月二十六日から始まった。敵の頑強な抵抗に阻まれ、なかなか突破できなかつたが、二十七日の夜明け、葉の独立連隊が農民協会の手引きを得て東南の山道を通って古塘角に回って敵の後方右翼から突撃し、陳銘枢、張發奎の部隊も正面から猛攻を加え、幾度の争奪戦を繰り返したあげく、二十九日、北伐軍はついに汀泗橋を占領した。この一戦で革命軍の武名が知れわたり、第四軍も「鉄軍」という称号をかちとった。

当日午前十時、蒋介石は列車に乗り蒲圻から咸寧へ行く途中、汀泗橋を通つたが、「屍が重なり、目に触れて心傷む、この戦鬪の激しさを知った」という。*9同じ日に、郭沫若もかろうじて蒲圻から咸寧へ行く第八軍の軍用列車に乗せてもらった。汀泗橋を過ぎてまもなく、驚くべき光景を目にした。東側のまばらな林の中に、裸体で跪いたまま木に縛られた死体が三つあった。中の一人は異常に白く、肥っている。頭は垂れ、口もとに長い八字ひげがあった。みぞおちのところを親指大の弾痕があり、そこから流れた血が白い腹の上に黒い線を描いていた。首筋の後ろに紙をはさんだ竹がさしてあり、「法により旅団長×××一名を処断す」と書いてあった。督

戦した呉佩孚は陣地を失った將校を処刑したのだった。* 10

呉佩孚は大刀持ちの「執法隊」に命じて敗退した士官、兵士数百人を斬殺させたにもかかわらず、賀勝橋の陣地も三十日の午前、北伐軍の手に落ちた。呉は斬雲鶚を聯軍副司令に起用し、劉佐龍の湖北軍に漢陽を守らせ、劉玉春の部隊と河南軍の一旅団に武昌守衛に命じて自分も武昌に退いた。九月一日、第四軍、第七軍は武昌城下に臨んだ。九月六日、唐生智の第八軍夏斗寅師は漢陽城に迫り、劉佐龍は勝てぬ戦と悟り帰服して後に国民革命軍第十五軍に編成された。九月七日、第八軍はさらに揚子江を渡って漢口を占領し、慌てふためいた呉佩孚は河南の鄭州へ逃げ落ちた。漢陽、漢口が相次いで陥落、武昌はすでに孤城となった。

第七軍を率いた李宗仁は武昌城外に着くとすぐ攻城を始めたが、二丈（約七メートル）もある頑丈な城壁の前に、重砲をもたぬ北伐軍は歯が立たず、二度の攻撃も失敗し、強攻をあきらめた。ところが、九月三日、武昌前線に到着した蒋介石はカロン、白崇禧らを従え洪山の麓で視察した後、自分の直属部隊劉峙の第二師に先陣を切らせ、再度の攻城を決めた。広東出発の時、第一軍は二つの師団を参加させたが、一度も前線に出たことがなく、長沙に着く以前に、指揮下の部隊の軍紀が乱れ、多くの脱走兵も出たらしい。蒋も怒りを抑えきれず何度も部隊を集め訓戒し、師団長らに痛罵を浴びせた。

* 11 九月三日夜の作戦会議で、蒋は「厳しい口調でしゃべり、協議の意思毛頭なく、いきなり総司令が攻城命令を下したようなものだった」と李宗仁は回想している。* 12 会議に出た唐生智は第二師の戦闘力を疑い、江西戦線へ遣わして欲しいと申し出たのも痛に障った。屈辱を感じた蒋介石は劉峙に向かってこう言った。「意気地でも頑張らなければ人に会う面目なし。城下に屍を積み重ねても惜しまない、勇んで城を攻める以外、栄光を取り戻せないぞ」。* 13 焦燥と怒りは理性の判断を曇らせ、武昌城強攻は蒋介石の失策と言わざるを得ない。九月五日夜半、決死隊の攻城が始まった。劉峙

の第二師が武勝門と忠孝門、第七軍が中和門、保安門と望山門、第四軍陳銘枢師が賓陽門、葉挺の独立連隊が通湘門を攻めるとい態勢であった。郭沫若の回想によると、誰もが五日の晩にはきつと城内に攻め込めると思ったので、総政治部の人々は、翌日の入城の準備をするために、みな眠らなかつたという。決死隊が出撃して二時間経った頃、砲火の音がとくに激しくなり、戦闘が非常に激烈であることを思わせた。明け方になると、北伐軍がすでに城内に攻め込み、今市街戦をやっているという一報が入った。しかし前線からの確報ではなく、言い方もまちまちで、情報が錯綜していた。政治部の胡公冕が一度総司令部へ行って蒋介石に会った。ちょうど前線に電話しているところで、その話では第一軍の第六連隊が武勝門から攻め込んだという。* 14 蒋の日記にあたると、「電話の報告を受け、第六団が確かに入城、ほっと胸を撫で下ろし、真に受けた」とある。* 15 ほどなくしてそれが誤報だと判明した。

前線から帰ってきた鄧演達の護衛兵楊昇の話では、決死隊の一部は城壁の下に達し、少数のものは城壁の上によじ登った。しかし敵もすでに防備をそなえていた。遠いものには機関銃で掃射し、近いものには手榴弾を投げてきた。城壁の上によじ登った者は衆寡敵せず、みな城壁の下へ落とされたという。* 16

二十人の死傷者を出した度重なる攻城の失敗で、蒋は戦術を練り直し、強攻をあきらめた。九月七日に張静江、譚延闓両主席に宛てた戦況報告では、第七軍がすでに鄂城を占領し、漢陽、漢口を手におさえた今、安徽や河南からの援軍を待つ敵の望みは絶やされ、武昌孤城はもはやかめの中のスッポンだと断じて、包圍封鎖戦略を示唆した。* 17 その後地下道を掘り、城壁爆破も試みたものの、工事なんども頓挫した。しかし食糧の封鎖は絶大な効果を發揮し、十月初めから呉軍が開門して餓えた民衆を城から出すようになった。十月十日早朝三時、城内呉俊卿の部隊が寝返り、その機に乗じて第四軍の第十一師、第十二師、第八軍の第五旅、第九旅が中和門、

保安門から城内に攻め入り、劉玉春を生け捕りにして武昌城は陥落した。^{*18} その日はちょうど双十節で、漢口北郊の華商競馬場で空前盛大な建国記念大会が開かれ、十万人の群衆が詰めかけた。党旗、国旗がはためき、インターナショナル、革命歌の合唱、スローガンの絶叫、火を吐くような演説、広大な競馬場は興奮のるつぼと化してしまった。ちようど開会の最中に、武昌攻略のニュースが伝わり、民衆の熱狂はまさに絶頂に達し、津波のようにデモが始まり、漢口全市が沸き立った。それを目撃したテルニが郭沫若にこう言った。「こんな群衆はモスクワ以外では見られないよ」。^{*19}

九月十五日第八軍が湖北、河南省境の要衝である武勝関を攻略し、湖北の戦局は一段落したので、蒋介石は落城を待たず九月十七日に武昌を離れ、江西戦場へ向かった。同じ日に、ロシアから帰国した馮玉祥は綏遠の五原に入り、国民革命軍への加入を表明、国民聯軍総司令に就任した。

注

- 1 『北伐陣中日記』一九二六年八月二日。『近代稗海』（四川人民出版社、一九八八年）四五頁。一方、李宗仁によると、唐、李は最初から武漢攻略を主張したが、広州国民政府の中に、長沙占領の後、湖北に守勢をとり、主力を江西攻撃に回す意見があったという。

『李宗仁回憶録』（李宗仁口述、唐德剛撰写、上海・華東師範大学出版社、一九九五年）上巻、二五七頁。

- 2 蒋介石日記手稿本（アメリカスタンフォード大学フーパー研究所蔵。以下は「蒋介石日記手稿本」と記す）一九二六年八月五日。

- 3 中国第二歴史檔案館編『蒋介石年譜1887-1926』（北京、九州出版社、二〇一二年）五六二頁。

- 4 同右、五七五頁。

- 5 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』（小野忍・丸山昇訳、平凡社

東洋文庫、一九八七年）八一―九頁。

- 6 一九二六年十月三十日ボロディン宛てたレポート。Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China 1918-1927 Edited, with Introductory Essays, by C. Martin Wilbur and Julie Lien-ying How, Columbia University Press, New York, 1956, p416.

- 7 蒋介石日記手稿本、一九二六年八月十日。

- 8 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』五八一―六二頁。

- 9 蒋介石日記手稿本、一九二六年八月二十九日。

- 10 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』三一頁。

- 11 蒋介石日記手稿本、一九二六年八月十五日条、二十日条。『蒋介石年譜1887-1926』五六八、五七八頁。

- 12 『李宗仁回憶録』上巻、二七九頁。

- 13 蒋介石日記手稿本、一九二六年九月四日。日記に「孟瀟が第二師を是非とも江西へ廻せと言った、それは何ごとか。」とある。

- 14 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』七六頁。

- 15 蒋介石日記手稿本、一九二六年九月五日。

- 16 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』八一頁。

- 17 蒋介石年譜『1887-1926』五九六頁。

- 18 唐生智、陳可鈺、鄧演達が十日武昌から送った電報、同右、六五三頁。

- 19 『北伐の途上で他―郭沫若自伝4』二〇六一―二〇七頁。

打掌心、打屁股—不打不成人

—『沫若自伝』を読む(二)

上野恵司

教職にあった頃、周恩来の政協全国委員会での報告《当前文字改革的任務》(一九五八年一月十日)を教室で何度か読んだ。この報告は文字通り新中国の言語改革の当面の課題を概括したもので、その後の改革を進めていく上での基本綱領となったものである。

今、この文献について論じるつもりはないが、その第一部に、こんな箇所があり、

至于象我们这样的知识分子，跟汉字已经打了几十年的交道，当初写了别字给老师责备甚至打手心的事在记忆中已经渐渐淡薄，因此觉得繁体简体都无所谓，对于简体不热心，甚至还觉得不顺眼，思想上有抵触。(われわれのようなインテリは、もう何十年も漢字とは付き合ってきたので、その昔、別字(当て字)を書いて先生に叱られ、はては手のひらをぶたれたことも、記憶の中では今は薄れている。それゆえに、繁体であろうと簡体であろうとどうでもよく、簡体字に対して熱心ではない。それどころか略字は目障りであると感じ、強い抵抗感を抱いてきている。)

インテリが抱きがちな漢字簡略化に対する抵抗感をまことによく指摘している。

右の引用の中に出てくる「打手心」についてわたくしは、せいぜい竹製の三〇センチ用の物差し(今はプラスチック製に取って代わられたが、わたくしが学童であった頃はまだ竹製が主流であった)

で差し出した手のひらをぶたれるくらいに理解して、そのように受講生に解説してきた。罰ゲームで負けた人の手首を人差し指と中指を並べて強く打つ「しつぺ」を例えに引いたこともある。

なんという誤解!旧時の中国における「打手心」は、そんなまやさしいものではなかったのである。そのことを今回『沫若自伝』を読んで如実に教えられた。或いはこれまでも小説や映画でそんな場面に出会っていたのかもしれないが、記憶に残るほどの生々しさがなかったように思う。

刑具は厚さ一、二分、長さ三尺ほどの竹片。打ち方に略式と正式があって、略式の方だと、着物や帽子の上から乱打する。正式な方は、「打掌心」か「打屁股」、すなわち手のひらか尻を打つ。

この尻打ちの刑は、この上なく野蛮なものであったとして、郭は

小小的犯人要把板凳自己抬到「大成至圣先师孔老二」的神位面前，自己恭而且敬地挽起衣裳脱下裤裆，把两耳屁股露出来，让「大成至圣先师孔老二」的化身拿起竹片来乱打。(小さな罪人は自分で板製の腰掛けを「大成至聖先師孔老二」の位牌の前に運んで行き、自ら恭しく着物をまくり上げ、ズボンを下ろし、二つの尻こぶたをむき出しにして、「大成至聖先師孔老二」の化身に手にした竹片で乱打されるのである。)

と、述べた上で、

儿童的全身的皮肉是怎样地在那刑具之下战栗哟!儿童的廉耻心、自尊心，是怎样地被人蹂躏到没有丝毫的存在了哟!(その刑具の下で、子供の全身の皮も肉も、どんなにかおののいていたことか。子供の廉恥心、自尊心はどんなにか跡形もなく踏みじられたことか。)

と、刑罰が子供たちに与える心身両面の傷痕を指摘する。

郭自身が受けた刑罰としては、手のひらを打たれた時、割れた竹の先が刺さって血が出たことと、特に忘れることができないのはとして、「鉄かぶと」事件を挙げている。

勉強を始めて一、二年たつてからのこと、何度も細い竹で打たれて、小さい頭が一面かさぶたになり、痛くて夜寝る時に枕に頭がつけられずにこっそり泣いているのを母親が哀れに思つて、中にフェルトの耳が四つ付いた硬い古い帽子を探し出してきてくれた。これを刑具よけの「鉄かぶと」として珍重しているのを次兄が見つけて取り合いになった。或る日、兄に帽子を奪われて泣いているところを先生に見つかり、「秘密」をさとられてしまった。以後、頭を打つ前に帽子を脱がされたことは言うまでもない。

他にも立たされたり、下が三和土（たたき）の地面にひざまずかされたり、先生の機嫌が悪い時には、そのひざまずいている頭の上に板の腰掛けをのせたうえに、腰掛けの両端に縁一杯まで水の入ったおわんを置かれる。長くひざまずいたまま身動きができず、ちよつとも動いて水がこぼれようものなら、次の酷刑が待っている、といった次第である。

では、こんな刑罰を駆使する先生を、郭は恨んだり軽蔑したりしていたかという点、決してそうではない。それどころか、むしろ敬意を払ってさえた。

家塾の先生は沈煥章と言つた。廩生（りんせい）科挙の秀才の資格を有する者のうち、成績優秀で食禄の官給を支給されている者で、村の人々の信頼が厚かつた。すでに長兄と二哥（三伯父の息子）が学んでいて、向上心の強かつた郭は四歳半で入塾している。

我们沈先生的锐意变法，这是他卓识过人的地方。像他那样忠于职守，能够离开我见，专以儿童为本位的人，我半生之中所见的少。当然他起初也打过我们，而且很严峻地打过我们，但那也

并不是出于他的恶意。因为打就是当时的教育，不是他要打我们，是当时的社会要他打我们的。（私たちの沈先生が「時代の要請に応えて、辺鄙な田舎で」锐意改革に努めたことは、彼が人並みすぐれた識見を有しているところだった。彼のように職務に忠実で、個人の見解にとらわれることなく、もっぱら児童本位に尽くしてくれた人を、私はこれまでの人生でほとんど見たことがない。もちろん、彼も初めのうちは私たちを殴ったこともあり、それも非常に厳しく殴ったけれども、それとて別に彼の悪意からのものではなかった。殴ることが当時の教育だったのであり、彼が好きこのんで私たちを殴ったのではなく、当時の社会が彼をして私たちを殴らせたのであるから。）

「我半生之中」と言っているのは、郭は一八九二年生まれであり、右の文章を収める「我的童年」が書かれたのは一九二八年であるからである。

周報告の「打手心」を物差しで手のひらをぶつか、罰ゲームのしつぺくらしい理解し、しかも大学の教壇でそのように講じてきたわたくしの浅薄な認識を、郭の文章が根本から覆させてくれたことに感謝しなければならぬ。

前回、「いま捜し出せない」とした沫（マツ）か沫（マイ）かに ついての郭氏本人との問答についてのさねとう・けいしゅう氏の文章を友人が見つけてくれた。『現代中国文学大系第一巻・郭沫若篇』（河出書房、昭和29年6月）の月報。

「先生の名は、マツジャクですか？マイジャクですか？」とのさねとう氏の問いに対する郭氏の答えは、「そうですね、ぼくのうまれたのは沫という川と若という川のあいだでした。四川省ですがね。もつとも、どつちも、ふるいところでは、上下の二本が、おなじながさにかいてありますね……」というもの。

郭沫若と李叔同の弟子李芳遠との繋がりについて

齊藤 孝治

二〇一六年一二月発行の「郭沫若研究會報」(第一六号)では、郭沫若と中国新文化運動及び日中文化交流の草分け的な存在であった李叔同(法名弘一法師)とがお互い自作の詩を書きにして交換するなど深い繋がりを持っていたことについて発表した。

今号では、後日、郭沫若が往事の折、連絡役を務めた李叔同の弟子、李芳遠に自ら創った詩の墨書を贈り、謝意を表していた逸話を紹介したい、と思う。

まず最初に李芳遠とはどんな人だったのだろうか。彼は、古来、中国の対外貿易港の一つとして知られる福建省泉州市の管轄下にある永春県東平鎮大平村(現在も同じ)を祖地とする人で、一九二四年八月二十九日、省の西南部に位置する廈門市の鼓浪嶼で李漢青の二男として誕生した。

父の李漢青は、元々新聞記者で、省都福州にあった福建法政専科学校(現福建師範大学)を終えると、程なくして鼓浪嶼の共同租界に出、上海の日刊紙「申報」「新聞報」の廈門特派員を務め、やがてその能力を買われ、地元紙「民鐘報」「江聲報」で総編輯という重責を担った人だった。

李芳遠が誕生した頃は、一転して国民党の廈門特別市党部の創設に奔走中であつた。

彼は、言論の世界だけでは満足しきれない野心的な人だったのである。

肝心の事務所は、鼓浪嶼の福建路に所在した元旅館内に置かれ、そこには新聞や雑誌、書籍が閲覧出来る「閲報室」も付設され、一般の人々に公開されていた。

この閲報室は、別名「私立鼓浪嶼圖書館」とも称し、館長は李漢青が兼任していたのである。

ただ鼓浪嶼は、一九〇一年以来、イギリス、アメリカ、日本、フランス、ドイツ、オランダ、スペインの共同租界になっており、各国はそれぞれ領事館を設けていた。

その共同租界の管理、運営については、各国領事から成る領事団の代行機構、工部局が事にあたっていて工部局には監事会ともいうべき「董事会」があり、メンバー七人は外国人六人、中国人一人で構成されていたのである。

もともと各国領事の間では、中国人の立場や地位を尊重し、一九二六年九月以来、中国人のメンバーを一人から三人に増やしていたが、増員の一人は李漢青だった。

後に李漢青は、副董事長にも就任している。このことから分かるように李漢青は、共同租界の名士になっていたのである。

一方、李漢青が館長を務める私立鼓浪嶼圖書館は、一九二六年、市の支援を受け、鼓浪嶼の西端に所在した北洋軍閥の一人、張毅の別荘跡に移転した。

そこは、三階建ての洋館で、移転前のチャチな佇まいとは比較にならないほど豪壮な施設であつた。

さらに私立鼓浪嶼圖書館は、二年後の一九二八年五月五日には、国民党の北伐成功を記念して国父、孫文の名をとり「中山圖書館」と改名したのである。

内容の充実な李漢青は、その年、わざわざ上海まで足を運び、大量の書籍を購入していたが、莫大な購入資金は、地元の富豪、黄奕の寄付によるものだった。



オープン当時の厦門中山図書館。
元は北洋軍閥の別荘

その時点で李漢青の二男、李芳遠は四歳になっていた。その人となりについて中国の史資料には、共通して「幼稟庭訓、聡慧好学、早歳即馳声于庠序之間（幼い時からしつけが出来ていて、頭がよく心が行き届き、学ぶことが好きであり、評判は周囲に知られていた）」と書かれている。要するに「梅檀は双葉より芳し」という喩え通りだったのである。

李芳遠が鼓浪嶼の最高峰

（九二・六八に今も存する日光巖寺で後に師となった李叔同（法名弘一法師）と運命的な出会いをしたのは一九三六年六月のことだった。

当の李叔同は、一九三二年一月末以来、厦門本島に所在する閩南有数の名刹、南普陀寺内に構える閩南佛教養正院で学僧の教導に従事していたものの、李芳遠と会う一カ月前の五月からは日光巖寺に一時的ながら出向いていたのである。

この日光巖寺行きの主な目的は、前号の「郭沫若研究會報」（第一六号）ではふれなかったが、上海の「世界書局」で刊行されることになっていった半月刊の叢書「佛學」の編集作業に携わるためであった。

李芳遠が李叔同に会ったのは、父李漢青の手引きによるものであり、いうまでもなく李漢青も同行していたのである。

時に李芳遠は弱冠一三歳だった。

兼々、李叔同を仰慕、敬愛していた李芳遠は、水仙の花束を贈り、

その意を表わしたのはいうまでもなかった。そして挨拶もそこそこに李叔同に対し、門下に入って帰依することを願ったのである。

この懇願に李叔同は有無もなく了解した。それというのも、その間のやり取りの中で李芳遠が若輩ながら好學であり、敬虔な人柄なことを察知したからである。

もともと「門下に入って帰依する」といっても出家して従僧になることではなく、在家のまま弟子に就くことであつた。

こうして二人は、永遠不変の繋がりを持ったのである。

ちなみに二人の年の差は四四歳もあつた。

しかしながら翌年七月七日、北京郊外の盧溝橋で勃発したいわゆる盧溝橋事件（中国では七・七事変という）は、二人の仲を安穩とはさせなかつた。



厦門の名刹、日光巖寺の今

さらに翌一九三八年五月一日、日本軍による厦門占領はそれに輪をかけたのである。

この異常事態に李芳遠は、父李漢青の強い意向もあり、父以下家族と共に祖地の永春に避難、疎開した。

盧溝橋事件が勃発した時、師の李叔同は、山東省の避暑地、青島にあつた湛山寺で南山律宗の講を開いていたが、事を知り、一〇月には厦門に戻ってきたのである。

船便を利用して上海経由だった。

その後、李叔同は、廈門本島の南普陀寺を拠点にしながら福建の晋江、惠安、南安などで是れ布教に務めた。

そんな李叔同に遠方の知人、友人は、手紙で「安全な内地に疎開されたら…」と勧めたが、李叔同は頑として聞き入れなかった。

それでも李芳遠の真情あふれる手紙には応じ、古くは貿易港として栄えた福建省漳州の南山寺に移動したのである。

その日は日本軍による廈門攻略の四日前であった。

そして初冬には、一九三〇年以來、公的な居留地になっている泉州の承天寺に移る李叔同だった。

この承天寺入内は、李叔同が高名だけに福建の新聞に報じられたのは当然であった。

ちなみに永春に引き揚げた李芳遠の父李漢青は、東南アジアに居住する華僑を相手に貿易業を営む傍ら董事長として友人の郭礼宗らと「永春日報」を創刊していたのである。

いち早く李叔同の承天寺入内を知った李芳遠は、師の身を案じ、長文の手紙を送ったが、その中で彼は「この際、俗事にまみれることなく閉門して静かに仏事にあたられては…」と訴えた、という。

この手紙に大いに感動した李叔同は、直ちに「惠書誦悉。至用慚惶！自明日起、當即遵命、閉門靜修、摒棄一切」（惠書悉く通読しました。いろいろ考えると慚愧に耐えませんが！明日からは即、言われる通りに事にあたりません、門を閉ざし静かに修行修養します、俗事一切を捨てることにしますよ）との返書を出したのである。

そうした状況下、李叔同は翌年、春が到来するのを待ち、李芳遠のいる永春に向った。それは晋江を遡上するものであり、木船や小舟を利用してだった。

ただこの永春行きについては、永春の僧による四回もの懇願があったこともふれておきたい。

李叔同が南安を経由して永春に到着したのは、四月一四日のこと

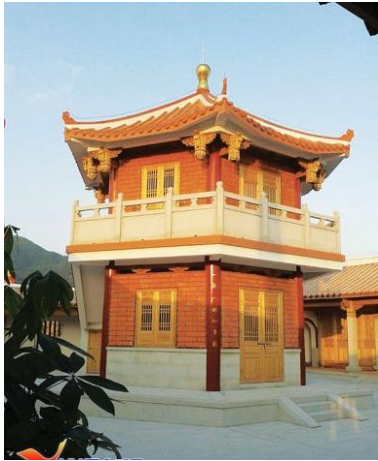


李叔同の修業に励んだ普濟寺。
五代時代（907～960）の創建

である。

さすがに永春に到着した翌一五日には、李芳遠らの案内を断るわけには行かず、環城路にある名勝として有名な環翠亭に行き、六角形をした二層の楼閣に登ったり、亭内の荔枝（レイシ）、芒果（マンゴー）園などを見て回った。

ついでに言うと、後々のことだが、同亭は抗日戦争中、一帯共々日本空軍機の猛爆を受「七・七紀念亭」と呼ばれたこともあった。



永春の名勝、環翠亭の楼閣（復元）

続く一六日は、永春佛教會の懇請で同じ環城路に所在する民間宗教の法堂「桃源殿」の講堂で「佛教之簡易修持法」と題する講演を行なったのである。

この講演は、高名な李叔同が行なうものだけに前評判は高く、中国の史資料によると「当日は立錫の余地もないほどの盛況ぶりだった」と記されている。

しかし元々「永春では静かに修行修養に務めたい」と決心した李叔同は、翌一七日には市の中心から西北に三〇キロ程行った蓬山麓に位置する普濟寺に赴いたのである。

以来、李叔同は翌一九四〇年一月一〇日までのおよそ一年半も普濟寺に籠もった。

李叔同の普濟寺での日々について同寺の「重修蓬山普濟院記」には「掩關治律、弘揚佛法、撰著佛經」(律を治めることを秘かに行ない、仏法を高揚して広め、仏典を撰したり著したりした)とか「十分儉朴、三衣過冬、兩餐度日」(十分に儉約質素であり、三枚の衣服で冬を過ごし、一日に二度しか食事をせず)と記されている。

そんな中、一九三九年一月一日、李叔同は六〇歳の誕生日を迎えたのである。

門を閉ざし身を律していた李叔同が普濟寺で寿事を一切、行なわなかったのは当然であった。

それでも詩人の柳亜子、教育者兼文学者の夏丐尊、漫画家の豊子愷、画家の徐悲鴻など各地の友人、知人から寿事を祝う手紙、詩、賦が贈られてきたのである。

ほとんどは李芳遠を介してだった。

その際、香港の九龍にいた知友の柳亜子は寿祝の五絶二首を送って来たが、一首の第一、二句「君禮釈迦佛、我拜馬克斯」(君は釈迦佛を礼拝し、我はマルクスを崇拜する)は何とも曰く言い難い句である。

実は、李叔同と柳亜子は、一九二二年、上海にあった詩人の同人組織「南社」の仲間だった。

だが四年後の一九一六年、李叔同が仏門に入ったために以来、二人は疎遠になっていたのである。

国民党左派に属し、共産党に好意的だった柳亜子は、李叔同の抗日戦争、国民党に対する姿勢、態度が「余りにも消極的で生ぬるい」と不満に思っていた、とされている。

ところでその頃、李叔同は、老齡に心労も重なって体調はすこぶる悪くなっていた。

そのことは、翌一九四〇年夏、李芳遠に贈った「見性、明心」(性格を見れば、心は明々白々である)という篆額に同封していた手紙に「老病頹唐、無能工也」(老衰して精神が委縮し、仕事が出来なくなつたよ)と記していたことや、さらにその後送つた手紙には「近拟埋光埋名、逐世終老」(近く光は見えなくなり名は隠れるであろうし、世を去り老いを終える)との句を挿入していたことから明白である。

その間、すでに李芳遠には、遺書ともいうべき「問余何適、廓你亡言、華枝夏滿、天心月圓」(余に何か適当な言葉を、と問うのですか、あなたに陳開する言葉はありません、木の枝には花が華やかに咲き春が満ちあふれ、天の中心には月が円く輝いていますよ)という賦を直接、渡していた。

併せて「無畏」(畏れることはない)という篆額も贈っていたのである。

こうして老いと死を強く自覚した李叔同は、一月一二日朝、小雨の降る中、普濟寺の僧に見送られて永春を後にしたのである。

その際、前以て李叔同の普濟寺下門を知らされていた李芳遠は、住んでいた東平鎮の船着場で下流に向かう船を待ち受け、師と別れの挨拶を交わした。

後に李芳遠は、その時のことを「送別晚晴老人」という一文の中で「船着場では相對して座り、お互い終始無言でした。淺瀬だったために船底が川底の石にあたり、〃サツ、サツ、サツ〃という音が聞こえ、その響きは今も耳の奥に残っています」と述懐している。

その後、李叔同は、晋江の福林寺に立ち寄り、翌一九四一年冬、泉州に戻つたのである。

泉州に戻つた李叔同は、承天寺を公的な居留地しながら百原寺、開元寺などを転々とした後、温陵養老院を終の棲家にした。

そうした中、「郭沫若研究會報」(第一六号)でふれたように一九四二年春、郭沫若と李叔同はそれぞれが創った詩の墨書を交換し合っていたのである。

その折、二人の間で李芳遠が連絡役を務めたことも同号で簡単ながらふれていた。

ともあれ彼らは、郭沫若は重慶、李叔同は泉州、李芳遠は永春とそれぞれが遠隔の地にいたのである。

しかも時は抗日戦争の最中であつた。にも関わらずどうして書の交換がスムーズに運ばれたのだろうか。

それは、李叔同の知友であつた柳亜子の存在が極めて大きかつた。意外だが、柳亜子は李芳遠の書法(書道のこと)の師だつたのである。

そのやりとりは「通信によつてであり、教えたり、討論したりしていた」と永春市共産党委員会がまとめた史資料には書かれている。

この二人の師弟関係については、紙上に載っている李芳遠の「奉題柳亜子墨贖」と題する賦の写真を見れば明らかである。

前述の史資料によると、書は李芳遠が一六歳の時にしたためたものであつた、という。

ちなみに李芳遠の筆法は「隸楷之間、形象古拙、筆法嚴謹、外柔内剛」とされている。

片や郭沫若もその頃、柳亜子と深い縁で結ばれていたのである。折から一九四一年一月一六日は、郭沫若の生誕六〇周年にあたり、重慶を主に桂林、香港、シンガポールなど各地で「郭沫若生誕

六〇周年・作家活動二五年」を祝う催しが挙行された。

その時、香港にいた柳亜子は、同地での催しにあたり主席団のトップとして大いに盛り上げたのである。

さらに同年一二月二四日、日本軍の香港攻略が敢行されたためにその後、柳亜子は広西省の桂林に移動せざるを得なくなつたが、や

がて重慶にいた郭沫若と詩の交換を行なう間柄になつた。この詩の交換には、桂林に避難中の劇作家田漢も加わつたのである。

このふれあいの中で柳亜子は、当時、郭沫若が取り組んでいた戯曲「南冠草」の執筆に対して資料を提供するなど協力した。

ちなみに「南冠草」は、一六四七年、一四歳という少年ながら明の再興を願う父、夏允彝に従い抗清のために決起し、殉死した早熟の詩人夏完淳をモデルにした作品である。

実は柳亜子も夏完淳の研究者であり、自著「題夏内史書」で夏完淳のことをいろいろと書いている。

郭沫若が柳亜子の様々な好意に感謝していたのは当然で、後のことだが、一九五三年五月一九日、柳亜子の五六歳の誕生日には「寿柳亜子先生」という祝賦を贈り、謝意を表しているが、その中で柳亜子と夏完淳についてふれ、二人は星占いでも相性のいいことを述べているのである。

以上のように三人三様、何とも不思議な縁で結ばれていた、といえる。

そうした関わりの中で郭沫若は、紙上に載っている写真の七律を李芳遠に贈っていたのである。

いうまでもなく贈呈は、冒頭にもふれたように郭沫若と李叔同との墨書の交換の際、仲介の労をとつた李芳遠の並々ならぬ労苦に對してだった。

その七律を定型に従い楷書体で書くと次の通りである。

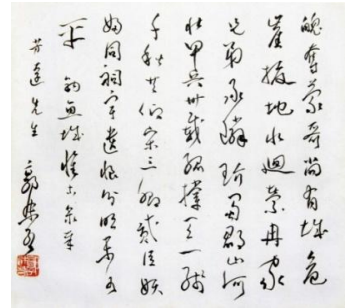
釣魚城懷古

魄奪蒙哥尚有城、

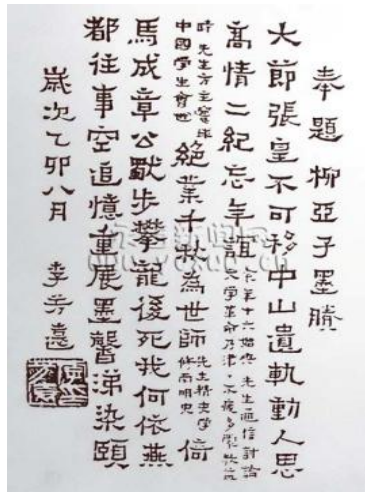
危崖拔地水廻蒙。

冉家兄弟承璘玠、

蜀郡山河壯甲兵。
卅載孤撐天一線、
千秋共仰宋三卿。
貳臣妖婦同祠宇、
遺恨分明未可平。



郭沫若が李芳遠に贈った書のコピー



几帳面な李芳遠の書。融通無碍な李叔同の書とは対照的

附記の上款には、李芳遠のことを「芳遠先生」と敬称が付けられているが、実は、郭沫若は李芳遠より三二歳も年上だった。ただ面白いのは、李芳遠が郭沫若から贈呈された七律の第二句「危崖拔地水回濛」中、最後の二字は「廻濛」となっているもの、もっぱら一般に引用されている「郭沫若全集」では「回濛」と違っているのである。

この相違は、郭沫若がこの七律を墨書にし、方々に配布していたことを意味しているのではなからうか。

ところでこの七律の舞台になった釣魚城は、重慶市の中心から北に五〇キロ程行った釣魚山(高さ約三〇〇メートル)の山頂に所在している。

郭沫若は、一九四二年六月三日、実際、釣魚城まで赴き、創作していたのである。

当時、重慶市から釣魚城に行くには、もっぱら船で嘉陵江を遡上するのが最善の方法であった。

釣魚城行きは、郭沫若にとり相当難行苦行であった、と推察される。

そのようなわけで、次号では、七律の訳、註は元より釣魚城行きの経緯をはじめ同城の歴史、近況などを記したい、と思う。

最後になったが、肝心の墨書は、李芳遠が師の李叔同に習い、終生妻帯しなかったために相続が叶わず、結局「流浪」する運命になったのである。

墨書は、折にふれオークションにかけられており、筆者がそのコピーを手でできたのもそうした絡みからであった。

郭沫若研究者として「流浪」は残念至極としか言いようがない。

□ 参考引用文献

- ・ 「天津鄉賢李叔同」 天津河北区文史叢書編委會編 大中華文化出版社刊
- ・ 「送別晚晴老人」 李芳遠著
- ・ 「題夏内史書」 柳亜子著
- ・ 「郭沫若年譜」中 龔繼民、方仁念著 天津人民出版社刊
- ・ 「郭沫若全集 文学編2」 郭沫若著作編輯出版委員會編 人民文学出版社刊

二冊の著書を紹介する

岩佐 昌暉

長谷部剛・山寺三知 著

『林謙三《隋唐燕楽調研究》とその周辺』

関西大学出版部／2017年3月刊



林謙三は郭沫若が日本亡命中（一九二八―三七年）に親交を結んだ日本人の一人である。林は東京美術学校（現東京藝術大学）彫刻科出身。卒業直後から帝展に入選するなど彫刻家として知られていたが、同時に東洋音楽の研究者でもあり、その点において郭沫若と深いつながりがあった。郭沫若は、林と一九二八年に知り合ってから後その人となりや学問への真摯な態度に感銘を受け深い交わりを結ぶようになる。そして、林の著作『隋唐燕楽調研究』（以下、必要に応じて『研究』と略記）の中国語訳を買って出ただけではなく、その中国での出版（商務印書館、一九三六年）にも骨を折るなどの交流があった。さらには翻訳の副産物として「隋代大音楽家―万常宝」『文学』一九三五年九月号、翌三六年『日本評論』一月号に日本語

版「万常宝―彼れの生涯と芸術」発表）を書くなど、その交流をきっかけに新しい分野を開拓したりもしている。

彼と郭沫若との交流については、会報十四号に関西大学長谷部剛教授から提供を受けた、林自身のNHK国際放送の原稿（郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』）および長谷部教授による解説（郭沫若と林謙三）を掲載したが、このたびその長谷部教授と國學院大学北海道短期大学・山寺三知教授のお二人による著書『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』（関西大学出版部、二〇一七年三月刊）が出版された。

この書物は、正に書名の通り『研究』とその周辺についての研究書であって、翻訳篇（郭沫若によって中国語訳された『研究』の日本語訳）をメインに、その価値を論じた研究篇（陳応時・上海音楽学院教授『隋唐燕楽調研究』の新見解を論ず）、および同書の「周辺」を扱った資料篇より成る三七四ページの大著である。

なぜ日本語論文の中国語訳を、わざわざまた日本語に翻訳して出版するのか、詳しくは本書著者による解説を読んでいただきたいが、結論だけ言えば「中国語版があるのみで、日本語版は存在しない」うえ、「日本語原稿も一九四五年の（東京）空襲で焼失したものと「われ」残っていないからである。では、なぜ日本語版が存在しないのか。それには、林自身が述べ懐したように、彼の研究が「あまり特殊過ぎて日本で発表する機会がなかなか掴めそうも」なかったこと、林からその悩みを聞かされた郭沫若が「自分から進んで『じゃ私が中国文に訳して中国で発表できるように努めてあげましょう』と申し出」て、翻訳してくれ、出版先（上海商務印書館）まで世話をしてくれたという事情がからんでいる。

著者らの解説によれば「燕楽」とは「宴会時に奏せられる音楽」のことで、「燕楽調」とはその楽調の意味だという。それは「インドに起源し、中国南北朝時代の末期頃から亀茲（きゅうじ・キジル）を通じて伝来し、隋を経て唐代に完成し、日本にも伝来して日本雅

楽の形成に決定的な影響を与えた」という。そして林のこの『研究』は「燕楽調の起源・名称・性質等について、インド音楽、日本の雅楽や正倉院楽器をはじめ、古今東西の文献や楽曲・楽器等の分析を通じてはじめて実証的に解明した、東洋音楽研究史における名著」だというのが著者らによる評価である。

だが、そのような名著も、中国では活用されて「隋唐音楽研究、および音楽に関連する文学の領域では必読の書とみなされている」ほどだが、「日本での認識は中国ほど高くはない」。実際にも日本の中国文学研究で『研究』を活用しているのは村上哲見『宋詞研究—唐五代北宋篇—』（一九七六、創文社）など少数にとどまるといふ。一方、林の業績はこれ以外に『明楽八調研究』、『敦煌琵琶譜的解読研究』（ともに一九五七、上海音楽出版社）や、『東亜楽器考』（一九六二年、北京、音楽出版社、訳者は銭稻孫）が出版されるなど、中国の学界ではよく知られており、「日本よりも中国で有名な学者」（須田禎一）とさえ評されるほどだった。

こうしたことから、著者らは「中国語版しか存在しない『研究』を、日本語原著の姿に能うかぎり復元することによって、林謙三の最初期の研究成果を中国に遅れること八十年にして日本に紹介し、それによって林の東洋音楽研究について、再評価・再構築を進めよう」とされたのである。

私は東洋音楽史研究については何一つ知ることのない門外漢であり、翻訳復元された『研究』も、その内容を全く理解できない素人に過ぎない。従って内容について何かを述べることはできないが、著者らが「林の東洋音楽研究について、再評価・再構築を進めよう」と考え、その実現のために苦心努力した具体的な取り組みには強い感銘を受けた。特に「再評価・再構築」の前提となる『研究』の翻訳復元への著者らの取り組みは高く評価したいと思った。以下、そのことを書いておきたい。

もともと日本語で書かれているが、その原稿はすでに失われている

て、中国語しか存在しない文章、さらに、その著者もすでに故人であるような文章、それを元の日本語に復元するなどということは、不可能である。可能なのは、能うかぎり原著に近い日本語文の復元でしかない。文献資料において、そのような復元がこれまで行なわれたことがあるのかどうか知らないが、前例の有無に関わらず、作業は困難を極めるだろう。著者たちはその困難をどのように克服しようとしたのだろうか？本書「翻訳篇」冒頭に『研究』の復元に対し、著者たちが設けた指針が掲げられている。著者らは郭沫若の訳文の中国語には林謙三の日本語を直訳したとおぼしき箇所が多々見られることから、郭氏の中国語を「妄りに意訳することは避け、林氏の原著の姿に可能な限り近づけるよう努めた」とし、その具体例を次のように述べている。

例えば、林謙三氏が自身の論文・著書において使用している語或いは『研究』と同時代の日本語の文献で用いられている単語が、郭氏訳文中に見られる場合には、それらをそのまま日本語の訳語として採用するよう努めた。また、その他、言い回しや表現等についても、林謙三の論文・著作を参考にし、極力それらに倣うように努めた。（翻訳凡例・翻訳の方針）

これは幻の日本語原著を復元するに当たったの表現上の方針を述べたものだが、そのほか、注意すべき点が、「翻訳凡例」に「底本について」「体裁について」「古籍の引用文について」「文字・表記について」と五頁にわたり明らかにされている。『研究』の翻訳復元の前に私たちはだかる困難を克服する点において、著者らの取り組みは、このようにきわめて慎重、厳密、かつ科学的であった。

東洋音楽研究者・林謙三の業績の再評価を目指す本書の目的は、著者らのこうした学術的努力によって見事に果たされていると考え、本書にはほかに、林謙三と郭沫若との交流を述べた二編の文

の2・3として刊行された。

巻頭の李怡教授による学術叢書の序（「作為方法的『民国』」）と本書の序文（「発現日本與発現自己」）は、文革後移入された西欧の文学研究の方法によって中国文学研究を行なうことに疑問を呈し、民国という時間と空間の現実在即して文学研究（の歴史化）を行なおう（それが彼のいう「方法としての民国」の内容の一つだ）と提唱している。今回の中国側参加者の論文は、日本留学経験者の文芸活動が民国文学にもたらした影響や、作品中の日本の影響などを論じていて、そこに「方法としての民国」という文学研究の実際、新しい潮流の一端を窺うこともできる。

なお、書名の『桌子的跳舞』（テーブルのダンス）はいうまでもなく郭沫若の同名の論文（『郭沫若全集』文学編第16巻所収）の題名からの借用である。

* * * * *

名和悦子会員・郭沫若関係資料の受贈について

名和悦子会員は、慶応大学卒業後、岡山大学大学院で郭沫若の第六高等学校在学中の事跡を調査研究された。その論文「岡山における郭沫若」（中国研究所『中国研究月報』580号1995年8月号所収）は、岡山時代の郭沫若の生活環境の研究に先鞭をつけたものと言っている。ついでに言えば、留学初期については劉建雲会員（第一高等学校特設予科時代の郭沫若『神奈川大学』人文学研究所報』52号2014年8月）をはじめとする一連の論考が、福岡時代については武継平会員の著書『異文化のなかの郭沫若 日本留学の時代』九州大学出版会、2002年12月）がそれぞれ詳細に明らかにしているが、おふたりの会員も仁和さんから資料の援助を受けたと聞く。その名和さんから、このたび岡山時代の郭沫若に関連する資料を当会あててご寄贈いただいた。（厚くお礼申し上げます）。

当面は、事務局のわが茅屋に置いておくが、研究に必要な会員には、郵送費はご負担いただくこととし、適宜（余り面倒なことを言わず）貸し出したと思う。左記に受贈資料一覧を記す。資料の必要な会員は、事務局までご連絡いただきたい。

- 一、1・岡山市明細地図（大正7年2月 大久保翠琴堂発行）
- 2・同地図国富地区拡大コピー
- 一写真（ネガ付き） A 郭沫若像（複製） || 1・郭沫若像（1911年成都）、2・郭沫若像（1912）
- 二・B 第六高等学校関係 || 1・漢文の吉田先生（写真のみ）
- 2・大正期の六高生、3・郭沫若六高成績表
- 三、B 第六高等学校関係（ネガのみ） || 1・六高全景、2・六高玄関、3・六高教授陣（集合）、4・六高への通学路、4 郭沫若卒業写真（集合）、5・六高同級生長谷川氏、6・岡山地図（ネガのみ）
- 四、1955年訪日関係（岡山滞在関係） || 1・岡山駅頭花束を受け取る郭、2・歓迎会で挨拶する郭、3・岡山ホテル記念撮影
- 五、その他 || 1・岡山図書館写真、2・卒業写真人名図、3 六高教授陣人名図、3・名和悦子「郭沫若と六高」山陽新聞コピー

郭沫若研究会報 第17号

発行日 二〇一七年六月二〇日
発行所 日本郭沫若研究会事務局
〒810-0031 福岡市中央区谷2-21-8-311
TEL062-715-2904 (FAX 兼用)
メールアドレス jpankakuten@gmail.com
ホームページ <http://www.tb.biglobe.ne.jp/~guomoruo/>
印刷 コピー印刷（社会福祉法人 福岡コピー）